



—2012年度春季展示室だより—

土浦市立博物館

平成24年4月1日発行(通巻第19号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(4～6月)・夏(7～9月)・秋(10～12月)・冬(1～3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころをご紹介しますものです。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(19) 古写真 「常陽銀行土浦東支店」



目次

- 古写真・絵葉書にみる土浦(19)・・・1
- 博物館からのお知らせ・・・1
- 【館長講座及び各展示と催し物等】
- 「十二観世音菩薩像」(中世)・・・2
- 藩主の逸話(近世)・・・3
- 土屋家との深いゆかり(近世)・・・4
- 川瀬巴水版画「土浦の朝」(近代)・・・5
- 「亀城会会報」にみる土浦(近代)・・・6
- 市史編さんだより・・・7
- 霞短信「土浦市立博物館の校外学習」・・・8
- コラム(19)・・・8
- 情報ライブラリー更新状況・・・8

もともとは、大正8(1919)年建築の三津輪^{みつわ}銀行の建物でした。三津輪銀行は旧土浦藩主の土屋家が経営した銀行で、明治34(1901)年に開業しました。昭和14(1939)年の合併により常陽銀行になりました。現在の常陽銀行土浦駅前支店にあたります。【情報ライブラリー検索キーワード「常陽銀行」】

博物館からのお知らせ

★★館長講座(茂木雅博館長)★★ 「私の考古学五十年」と題し、考古学者としての歩みをお話します。

5月20日(日)・6月17日(日) 各日とも 午後2時～(1時間30分程度) 会場:博物館視聴覚ホール

※4月15日(日)の館長講座は休講です

★★第33回企画展 「土屋政直—土浦藩主の横顔」★★

会期 2012年3月17日(土)～5月6日(日)

本年は、享保7(1722)年11月に82歳でなくなった政直の没後290年にあたります。区切りの年に、土浦藩の基礎を築いた政直の姿に迫り、土浦藩の藩主を通して見えてくる近世初期の大名の姿を紹介します。

○記念講演会

土屋政直とその時代 4月8日(日) 講師:吉岡孝さん(國學院大學准教授)

土浦藩江戸屋敷の世界 4月22日(日) 講師:松本剣志郎さん(東洋大学助教)

各回とも、午後2時～3時まで 定員:70名 会場:博物館視聴覚ホール

聴講無料(但し、4月22日は別途入館料がかかります)

○展示解説会 殿様のことをもっと知ろう 4月7日(土)・28日(土)

午後2時30分～3時00分まで 案内:博物館学芸員

★祝日開館します★ 4月29日(日)、5月3日(木)、4日(金)、5日(土)

★休館のお知らせ★ 毎週月曜日(但し4月30日を除く)・5月1日(火)

★無料開館のお知らせ★ 4月8日(日) 桜まつり協賛 5月18日(金)・5月20日(日) 国際博物館の日

★春季展示は4月1日(日)～6月下旬までです★



博物館マスコット
亀城かめくん

※お知らせ欄の行事・日程は一部変更となる場合がございます。

「十二観世音菩薩像」 (市指定文化財) 伝 祥啓筆

かきおかぎょうぶのしょうゆうみなもののはるちか
 — 柿岡刑部少輔源治親寄進 —

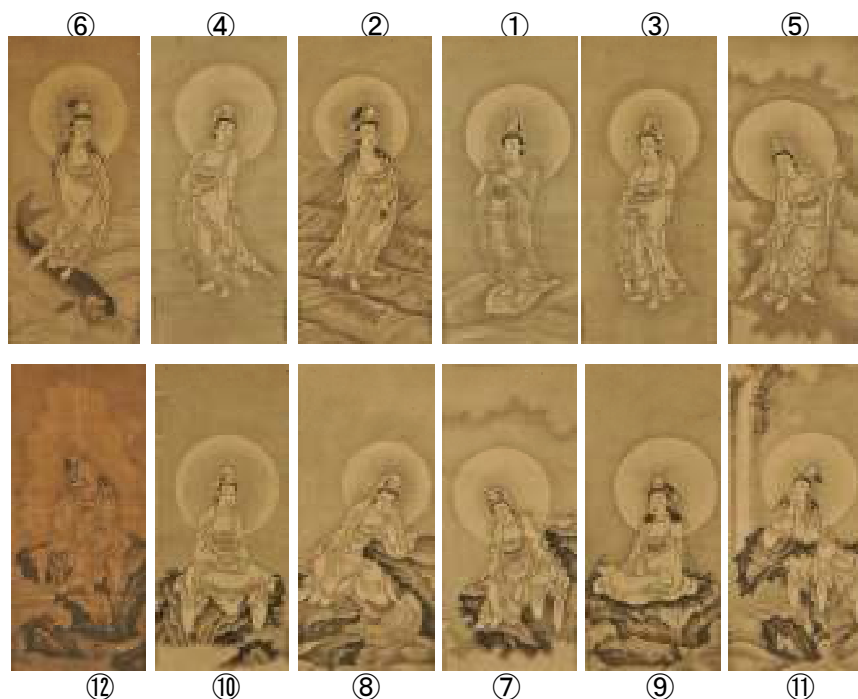
観世音は「妙法蓮華經」普門品（観音經）などに説かれる菩薩のことで、一般に観音様で知られています。観世音は衆生の求めに応じて種々の姿に変化するとされ、その信仰の起源は中国浙江省にある普陀山です。この観音像は、浙江省の天目山で修行した復庵和尚が開いた法雲寺（市内高岡）に伝わるもので、法雲寺は禅宗系寺院であり、観世音像が禅宗系寺院の画題としてしばしば描かれることから由来がうなずけます。

観世音像の姿は六観音・七観音・十五観音と様々ですが、全部で三十三身が知られています。法雲寺に伝わる観世音像は左右六身ずつの十二観世音ですが、本紙右下に「常州大雄山法雲寺公用世三幅之内」とあり、元来は三十三身全てがあったと思われます。また、本紙左下には「奉寄進柿岡刑部少輔源治親」とあり、柿岡刑部の寄進によるものであることが分かります。柿岡氏は小田氏の支族で柿岡城（石岡市）を居城としていたといわれています。柿岡刑部は「関東幕注文」（「霞」4号参照）に見られる「柿岡刑部太輔」との関係がうかがわれます。法雲寺の伝書である「法雲寺雜記便覧」によると、この観世音像は弘治年間（1555～1558）に散逸してしまい「観音乗鯉図」の一軸のみであったのが、後に十一幅を得たと記されています。一方、収納されている桐箱の蓋には「観世音十二幅啓書記筆」と墨書があり、室町時代中期の画僧で大本山建長寺（鎌倉市）の書記であった祥啓の作とされています。しかし、建長寺にある伝祥啓筆の観音図像と比べると、本図は背景描写の緻密さに欠け、線描的な印象を受けます。

この観音菩薩像の特徴は、一般的な三十三観音の姿や名称に合致しないことがあげられます。姿は六身ずつの

立像と坐像に分けられますが、それぞれが三十三身の何れにあたるのかがほとんど分かっていません。名称は軸装毎に①蓮葉上持鉢立、②持瓶踏波、③拈念珠立、④右行左顧、⑤雲中右顧、⑥洒水、⑦騎鯉、⑧倚巖俯看、⑨左手撐頬、⑩倚巖之下有珠放光、⑪巖上籍草坐、⑫巖上趺坐、⑬倚巖看瀑、⑭倚巖左顧（ルビは読み下し）と表装裏面に記されています。図像と名称は禅宗特有のものと思われませんが、その意味するところはこれからの研究課題となっています。

（中澤達也）



十二観世音菩薩像（法雲寺所蔵）

5/26（土）午後2時から
 このページでご紹介した
 資料の展示解説会を開催
 いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも中世コーナーに展示）

● 法雲寺関連文書 22 通

今回、初めて十二幅全てを一堂に展示します。



藩主の逸話

—「有言録」—

土浦藩2代藩主土屋政直には次のような逸話があります。

元禄14(1701)年12月赤穂浪士が吉良邸に討ち入る事件が起きたのち、老中政直が登城しない日に浪士切腹の決定がなされた。天下の大事件への処断に老中のひとりが欠席したまま決定するということはない。政直には何か思うところがあってわざと登城しないことにしたのではなかろうか、切腹ではなくもう少しやり方があるのではないかという気持ちの表れなのではないか、と人々が噂した。

忠義を重んじる政直は赤穂浪士の救命を願っていたようですが、かなわなかったのだと逸話は語っています。政直は貞享4(1687)年47歳で老中に就任、その後78歳まで在職し、綱吉から吉宗まで4代の将軍に仕えました。なかでも綱吉には21年間仕えました。当時、綱吉は老中と距離をおき、側用人を重んじる傾向がありましたが、老中が幕府の最高職であることに変わりはありません。政直は綱吉より5歳年上、官僚としての職分を守り、誠実に職務を全うする政直の姿は綱吉にも好ましく映っていたようです。

政直の父数直の逸話も伝わっています。

数直が家光の咎めを受けて閉門中、家光が上洛することになった。数直も付き従おうとしたが、謹慎中の外出は論外であると家臣らが押しとどめた。数直は「随行しないことこそ不義である」と、密かに上洛した。京都へ着いた家光は、「数直がかならず来ているはずだ」といい、家臣が近郊に潜んでいた数直を見つけた。召し出された数直を見て家光はしばらくにらんでいたが、数直の謹慎をゆるした。実は数直は以前「どんなところにも付いてまいります」と家光に申し上げたことがあったのである。

閉門を破って外出するのは主君に反する罪ですが、数直は家光との以前の約束を理由に、あえて主君の命に背いたのです。それでも許されたのは数直が家光の小姓から頭角を表し、将軍と強い信頼で結ばれていたことが背景にあったことなのでしょう。

これらの逸話は「有言録」という古文書に収録されています。戦国時代の荒々しい気風が抜けきらない時代を生き抜いた数直と、知恵と工夫で武家社会を生き抜こうとした政直との対照的な姿が描かれています。「有言録」は江戸時代後期の編集と推測されています。数直や政直が藩主であった時代、土屋家は領地を拡大し、藩主は幕府の重職に就いていました。土浦藩9万5千石の礎を築いた2人の藩主が、どのような言動をしていたのか、それをふり返って将来を見通したい、そんな意図があったようです。(木塚久仁子)



有言録(個人所蔵) 写真左:本文、写真右:目録部分

4/28(土)午後2時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。(いずれも「大名土屋家の文化」コーナーに展示)

- 土屋政直「福祿寿」
- 「金葉集(玉藻切)」



土屋家との深いゆかり

じょうしゅういばら きぐんいずみむらあたごさん えす
—「常州茨城郡泉邑愛宕山絵図」—

明日は春の大祭だという日、愛宕神社（笠間市泉）を訪ねたことがあります。多くの氏子の方々が境内を清めていました。

愛宕神社の歴史は古く、大同元（806）年の創建と伝えられています。愛宕神社のある愛宕山には、むかし天狗が住み、修行したという伝説があります。火具土命と水波能女命をまつる愛宕神社は火防に効があるとして信仰され、近隣の消防団の絵馬もたくさん奉納されています。参詣者でとてもにぎわっていた時代もあり、「愛宕神社のようになりたいと成田山で言っていたらしいよ」と氏子の1人がそっと教えてくれました。

文政10（1827）年作成の「常州茨城郡泉邑愛宕山絵図」は、愛宕神社のある山頂からふもとまで山全体を俯瞰した図です。神社の「オクデン（奥殿）」「ハイデン（拝殿）」をとりまいて「ミセ（店）」の建物が描かれ、多くの参拝客を迎えた盛況ぶりがしのべられます。山のふもとには田畑が広がり、ため池には水がたたえられています。この図には愛宕神社を中心に豊かな農村の姿が描かれているのです。

この図の持ち主は土浦藩士でした。愛宕神社のある泉村、岩間上村と下村は、万治元（1658）年から幕末まで土浦藩土屋家の領地でした。土浦城主である土屋家は最初から大名だったわけではありません。久留里藩土屋家出身の数直（1608～79）が旗本から身を起し、しだいに領地をひろげていったのです。

泉村を含む岩間領5千石は土屋家が常陸国で初めて得た領地でした。土屋家は岩間領を得るとすぐ、陣屋をおいて支配の拠点としました。絵図の右下に描かれている竹矢来を回らせた建物がそれです。

愛宕神社に対して数直は毎年幣帛料を納めていたといえます。3代陳直（1695～1719）は、愛宕神社に詣で、先祖ゆかりの地に感激したことを紀行につづっています。

絵図には庶民の信仰を集めただけでなく、藩主の帰依も厚かった愛宕神社とその周辺の様子が書き留められているといえましょう。

城下町土浦の人々も愛宕神社を信仰しており、拝殿正面の賽銭箱には「横町」の文字が大きく打ち出されています。明治時代に土浦町横町（土浦市城北町）から寄進されたようです。



（木塚久仁子）

愛宕山絵図（部分）（当館所蔵）

4／7（土）午後2時から
このページでご紹介した
資料の展示解説会を開催
いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも近世コーナー

「歴代藩主の横顔」に展示）

- 「土屋政直書状」
- 土屋陳直「常州岩間御記行」



かわせはすい

川瀬巴水 版画「土浦の朝」

—描かれた水辺の風景—

かつて土浦の町にはたくさんの船が川面を行き交う、水辺の風景が広がっていました。明治時代末期以降の古写真などからその様子を知ることができますが、今回は水彩画のような色調で昭和初期の土浦を再現した版画「土浦の朝」をご紹介しますと思います。

作者の川瀬巴水（1883～1957）は、日本各地を旅し、そのスケッチをもとにたくさんの風景版画を制作しました。その多くは、伝統的な木版画技術の復興と版画の普及活動を目指した「新版画運動」を提唱した渡邊庄三郎（1885～1962）を版元としたものです。巴水が絵を描き、職人が彫り・摺りを手掛け、版元が発行するという方法で制作され、色版を何度も摺ることで、色調豊かな木版画が生まれました。

写真の「土浦の朝」も渡邊庄三郎による渡邊版画店を版元としたもので、左下に「昭和六年九月作」とあります。『川瀬巴水木版画集』の中に巴水の写生帖 81 冊の内訳が紹介されていますが、その第 32 号（昭和 6 年 8 月 18 日～8 月 28 日）に、「八月二十七日 土浦」、「二十八日 土浦の朝」というように「土浦」が登場します。おそらく 8 月 27 日から 28 日にかけて土浦を訪れ、28 日のスケッチを 9 月に版画作品にしたものが「土浦の朝」であると考えられます。

「土浦の朝」について同版画集の中で檜崎宗重氏は、「朝霧にまだ舟も木も道もあたりの空気も、しっとりとぬれた気分を出そうとしたものであろう。朝風の僅かに動いてかげゆらぐ川面もよい。この絵はじっと眺めていると趣の深まる作である」と述べています。水辺の朝のひとつきが静かに表現された作品です。

巴水の写生帖第 32 号には、土浦の写生とともに次の一文があります。「ある場所をくぎりて写生する事は、きたなかつたりみにくかつたりする場所をカットせる事で、所謂一部写生は其点で、見る人をあざむき其場所をよりよく思はせる、誠意なき事ではあるまいか?」。巴水が写生表現の難しさを感じながらも、限られた画面の中に偽りない表現をすることを心がけていたことがうかがえます。そのような心情の中で制作された「土浦の朝」は、風景の一部を切りとったものではありませんが、水辺の町の風情が凝縮した一枚といえるでしょう。（野田礼子）

主な参考文献：『川瀬巴水木版画集』（渡辺規編

毎日新聞社 昭和 54 年）



土浦の朝（当館所蔵）

5/5（土）午後2時から
このページで紹介した
資料の展示解説会を開催
いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも近代コーナーに展示）

- 川瀬巴水版画「雨の牛堀」（昭和 4 年）
- 川瀬巴水版画「浮島柳縄」・「浮島戸崎」（昭和 11 年）



「亀城会会報」にみる土浦

—郷土と東京をつなぐ機関誌—

昭和5（1930）年、旧藩主土屋家への報謝や旧藩士族らの交流を目的に「亀城会」が誕生しました。事務所を東京の土屋子^{ししやく} 爵邸に、支部を土浦の三津輪銀行（土屋家が経営した銀行で、昭和14年に常陽銀行へ合併）におき、藩租^{はんそ}をまつる土屋神社の祭典をはじめ、土屋家へのご機嫌伺^{きげんうかが}い、旧藩士の子弟への学資貸与などを行いました。会員は東京と土浦、そしてそれ以外の地方在住者とに分かれ、総会は東京と土浦とで交互に開催されました。

亀城会の会員たちのもとへ年2回ほどの割合で届けられた機関誌が「亀城会会報」です。昭和5年11月に刊行され、昭和19年12月の第24号までの発行が確認できます。会報の編集は東京で行われ、出版業を営んでいた本図晴之助^{もとず}が中心になりました。会報といってもかなり本格的な雑誌です。旧藩ゆかりの人々の手による誌面にふさわしく、土屋家歴代藩主・藩士らを顕彰する記事、藩租・旧藩主墓所の参拝記などが掲載されています。また、会員による随筆や文芸、歴史考証、亀城会の総会の議事なども収載されています。

しかし、土浦在住の会員のなかには、文芸や随筆など雑多な記事が載る会報の編集方針に不満をもち、「郷土色が乏しい」、掲載記事を「大に取捨選択をせよ」と陰口をたたくものがいたようです。これについて本図は、「郷土的資料乃至郷土史談の外は、採用せぬ」というような雑誌では、東京および地方在住の多数の会員は「必ず不快に思ふであらう」と誌上で反論をしています（「亀城会会報を語る」『亀城会会報』第6号、1933年）。土浦以外に住む会員にとっては、郷土を紹介したり、郷土史に関する論考を書くことは難しく、寄稿の機会を失ってしまうからです。本図の反論からもうかがえるように、「亀城会会報」の書き手・読み手の多くは土浦以外の場所にあったようです。

そうした会員たちや会誌の性格を反映しているのが「郷土の種々相」と題した、いわば郷土通信のようなページです。町の三大イベントとしての花見・祇園祭・花火大会の賑わいを伝えたり、新浜街道（国道）の開通や土浦駅舎の新築など発展していく町の様子、新町長の人物評、そしてボランティアで街中の清掃活動をする青年の美談など、土浦の「今」を伝える記事が掲載されています。「亀城会会報」という雑誌は、土浦以外に居住する人々が「郷土」の今を知り、「郷土」の姿を理解する恰好のメディアであったのです。

「亀城会会報」が発行された1930年代の土浦町は、新しく造成された市街地の発展、桜川堤や土浦駅・亀城公園などの景観整備がすすみ観光地としての売り込みが行われ、未曾有の大水害に町が遭遇して復興をしていく時期、さらに隣接する真鍋町との合併による「大土浦市」を模索した時期と重なります。土浦と東京という立脚点にあって、郷土「土浦」を捉えていた「亀城会会報」は、土浦の近代史を考えるうえで欠くことのできない貴重な資料だと感じます。

（萩谷良太）



亀城会会報（当館所蔵）

6/2（土）午後2時から
このページでご紹介した
資料の展示解説会を開催
いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも近代コーナーに展示）

- 「土浦郷土読本」
- 「水郷の土浦」パンフレット
- 「植櫻碑」拓本



市史編さんだより

商人の富と力の象徴“土蔵造りの蔵” —『家事志 第五巻』から—

昔の田宿・中城・本町^{ほんまち}の通りには、土蔵造りの立派な蔵を持つ商家が並んでいました。伐った材木を時間をかけて乾かし、空気が乾燥している冬場に何度も漆喰^{しっくい}を塗り重ねるので、良い土蔵を建てるには3年もかかったそうです。そのため土蔵は豪商や大地主の富と力の象徴であり、土蔵造りの蔵を持つことは商人の夢であったといえます。

色川家の記録『家事志 第五巻』には、色川美年^{みとし}が土蔵を再建する話が出てきます。田宿（現在の大手町）で薬種店を営んでいた色川家は、文化13（1816）年の火事で店と土蔵を焼失。その後2千両を越える借財の返済と家業の再興に追われ、土蔵を再建できずにいました。しかし兄三^{みな}中と後継の美年の努力により、天保8（1837）年頃には経営も安定して、かなりの利益を上げられるようになってきました。天保14（1843）年12月に松浦のかし蔵が払物^{はらいもの}になることを知ったとき、美年はすかさず30両を支払い買い取りました。古蔵を移築した方が、資材の調達や作業の工程を考えると、新築よりも早く有利だったようです。土蔵が再建される様子を、美年は几帳面^{きちょうめん}に書き留めています。

天保14年12月28日 来月4日より仕事始めの積り。昨夜大工善助へ蔵普請^{ふしん}の事話す。

同15年1月15日 蔵今日迄に残らず引き入れになる。

同年1月29日 地引き初メ。地祭り。高松大和へ300文米1升^{つかわ}遣す。

2月12日 昨日より蔵地形^{じぎょう}（地ならし）初メ。

2月13日 東口3間通り丸松6本の下へ穴の幅丈^{すえ}けの松を横に並べ、その上へ右6本を居突立てる。

2月27日 材木が揃ったので大工初メ。善助与助兩人に任せる。

3月7日 蔵地形出来上がる。11日建前なので今日直ちに石を居させる。中条石屋吉五郎頼む。

3月11日 吉日なので土蔵（3間に5間奥行）建てる。棟上げ（建前）祝儀。

3月15日 足場^{うわや}上屋わたしにする。並びに壁小前わたし、壁小前（舞）20人40坪、上屋屋根16人。

3月24日 日柄よろしく、壁の荒打ちをする。

3月25日 蔵はじ巻、並びに屋根塗りをする。

5月7日 腰巻下石渡す。外に風窓2つ引き戸に拵える。

5月11日 土蔵壁横縄左官8人、手伝い6人、外に2人内より。

5月23日 蔵はじ巻棚塗る。左官3人来。

5月28日 土蔵屋根瓦葺き初め。田町瓦職人へ金2分1朱にて渡す。

7月13日 土蔵屋根石灰出来上る。はじ巻中塗りする。

8月19日 土蔵まわり庇^{ひさし}残らず、飛沫よけ残らず、大工善助へ40人にて渡す。前瓦屋根也。

11月5日 土蔵内壁中塗りする。11月13日 土蔵へ穀部屋などに入れ置く薬種物を運ばせる。

11月21日 土蔵内壁上ぬり石灰始まる。12月2日 土蔵2階へ店2階のけんどん箱移させる。

古蔵を解体し移築したとはいえ多くの作業が必要で、完成迄1年近くもかかりました。職人の手間だけでも相当の費用が掛かったと思われます。それでも美年は3月11日の棟上げの日に次のように記しています。

寛保四年本蔵建、文化中迄式度根つぎ其後十四年、類焼後蔵なし、此度其跡へ元之向二建ツ、当天保十五年迄百壹ケ年二成・・・（中略）・・・ふるまひ等之事も上屋主人被申二まかせ略キ申候、尤古蔵之事故万端其つもりにて省略ヲ用ゆ（原文より抜粋）

古蔵なので万端省略したとしながらも、棟上げ祝儀には餅を2斗1升つき、333文の銭をまいています。このことや、克明に普請の次第を記録した行間からは美年の喜びが読み取れます。商いの順調さを物語るように、その後も弘化4（1847）年に富田屋の古蔵を買い入れました。土蔵を建てることは、色川家にとって家の再興であり、土浦の本店としての地位を固めていく過程でもありました。そして三中美年兄弟の夢でもあったと思います。

（市史編さん係非常勤職員 村田茂子）

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動記録などをお伝えしております。

今号は、博物館の校外学習等を担当され、3月末で退職されました元非常勤職員の木本雪佳さんに寄稿いただきました。

「土浦市立博物館の校外学習」

博物館では毎年小学校社会科における「むかしのくらし」の单元にあわせて、市内外の小学生を対象とした校外学習の受け入れを行っており、私は平成23年度の見学案内のお手伝いをさせていただきました。

平成23年度は9月から3月にかけて、土浦市・つくば市・阿見町・牛久市・つくばみらい市より、28校の3・4年生、合計2,820名を受け入れました。内容は、昔の生活の中で使われていた道具の解説、はたおり（裂き織り）・綿の種とり体験、展示室の見学の3つです。

小学生たちに解説をしていて一番に感じた点は、大人と違ってとても素直な反応が返ってくることです。わかる・わからない、楽しい・楽しくない、など反応が直接返ってくるため、毎回の反省点・改善点が明確で、解説の仕方について小学生たちに学ぶことの多い半年間でした。

また例年と大きく異なる点は、1月7日～2月19日まで特別展「暮らしをささえる女性たち—紡ぐ・織る・仕立てる・繕う—」を開催しており、イベントとして綿の種とり・はたおり（裂き織り）体験を実施していたことです。このため、校外学習を経験した子供たちが家族の方たちと一緒に再度来館して、はたおりや綿の種とりの体験をしてもらうことができました。結果として、日曜日の小学生来館者が毎週10名にも満たないのに対し、イベントを開催している土曜日には平均して30名以上が来館してくれました。時間の限られた校外学習とは違い、親子でゆっくりと満足するまで体験してもらうことができとてもよかったです。

土浦市立博物館の校外学習では、これまで博物館に来たことがなかった子供たちに、博物館という新たな学びの場を紹介し、地域の歴史について学んでもらっています。校外学習を担当したことは、地域での博物館の役割を果たすための大事な活動であることを再認識するよい機会となりました。（元非常勤職員 木本雪佳）

コラム(19)－3・11震災時の博物館－

東日本大震災から早くも1年が過ぎました。震災時には古文書の会の方々を始め、館内には多くの来館者がいました。余りにも大きな地震であったことから、最初にとった行動は自動ドアの電源を切って手で扉を開け、避難口を確保するというものでした。ただし、壁面のガラスが割れることも心配でしたので、様子を見て少しおさまったところで外への避難誘導を行いました。

その後も大きな地震が続き、西櫓の壁が崩れるのを目の当たりにして、館が崩れやしないかと思うほどでした。しばらくしてから、懐中電灯を片手に展示資料や収蔵庫の点検を行いました。幸いなことにケースや展示資料には被害がなく、民俗資料の一部に若干の毀損^{きそん}が出た程度で済みました。10年ほど前に、地震に備えて棚には落下防止の柵を取り付けたり、紐を結んでいたからです。

しかし、振り返ってみると反省点もあります。この震災をきっかけに博物館の防災対策を改めて考え直し、“備えあれば憂^{うれ}いなし”を心掛けたいと思います。（中澤達也）

情報ライブラリー更新状況

【2012・4・1現在の登録数】

古写真 487点（＋5）
絵葉書 394点（＋5）

※（ ）内は2012年2月25日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1ページでご紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

霞（かすみ） 2012年度春季展示室だより（通巻第19号）

編集・発行 土浦市立博物館
茨城県土浦市中央1-15-18
TEL 029-824-2928
FAX 029-824-9423
<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php?code=43>
1～6ページのタイトルバック（背景）は、博物館2階庭園展示です。

2012年度春季展示は、2012年4月1日（日）～6月下旬となります。「霞」2012年度夏季展示室だより（通巻第20号）は7月1日（日）発行予定です。次回のご来館もお待ちいたしております。